大乗 DAIJO 法話

# お育て

大分・光徳寺住職
森（もり）　智崇（ともたか）

日だまりに温もりを感じ、紅葉が目立ち始めると、冬が近づいたというより報恩講の時季が来たと、いつからかそんなことを感じるようになりました。「ただ仏法は聴聞（ちょうもん）に極まる」と言われますが、私自身のこととして仏法を聞くと、なかなか素直に聞くことができず、苦難を乗り越えるための知識やアドバイスとして都合よく聞いてしまいます。一方で、私は私らしくありたいと願いながら、その先にどんな私でありたいかを知りません。また、縁にふれると、どんなことをする私なのかも知りません。いざ阿弥陀さまの願いに「そのままの私」を聞かせていただくと、それはそれで受け入れがたい自分にも出会います。しかし、それこそがお育てであったと気づかされます。

もう三十年も続いている「はじめてのおつかい」というテレビ番組があります。おつかいに行く幼いお子さんの行動と心情、そしてお子さんを送り出した親の心情につまされる長寿番組です。実はこの番組、ある時から私はどうしても見ることができないと避けていました。その時から数年が経ち、僧侶の生活にも慣れ始め、結婚をし子どもを授かった頃、今なら見ることができるかも、と久しぶりに視聴しました。

その回のおつかいは、カレーに使うひき肉を買ってきて、という内容でした。このご家庭ではカレーにひき肉を使うのか、などと私自身の視点の変化も感じ、この様子なら大丈夫だと落ち着いて見ていました。おつかいのゴールは頼まれたものを買うことではなく、おうちまで帰ることです。無事ひき肉を買ったお兄ちゃん、それを自分のリュックへ。「妹のお世話もお願いね」とママに頼まれていたお兄ちゃん。妹にも何か手柄をと、レジ横に陳列されたキャベツ一玉を買い、妹のリュックに入れてあげます。

お店を出たあとは来た道を引き返すだけです。でも、突然ふえたキャベツの重さに、妹はお兄ちゃんについていくことができません。急（せ）かす兄、どうしてもそれに応えることができない妹。ついには「にいちゃんのバカぁ」と妹が泣き出します。

よかれと思ってした行為がそうではなかったと自省した兄は、妹のリュックを自分の胸元に抱えて力強く歩きだします。しかし、やはり彼にもキャベツは重たいのです。加えて後悔の重さもあるでしょう。身軽になった妹は「がんばれ、がんばれ」と兄を励まします。

いつもの道なのに全く違った道に感じながら、

「あの角を曲がればもうすぐおうちがある。ママが待ってる」と、それだけを希望に幼いきょうだいは互いに手をつなぎ、ママのもとへ一歩一歩進みます。

玄関先では、終始落ち着きのないママ。角を曲がった子どもたちが見えた瞬間、全速力で子どもたちのもとへ駆け出しました。

「ママだ！」

張り詰めた不安がはちきれたように、空を見上げて大声で泣きだすきょうだい。転倒も恐れず全力で滑り込むようにわが子を抱き寄せたママ。「頑張ったね、頑張ったね」と声をかけ続けながら子どもたちと一緒に泣いています。もっと抱き寄せたいのにキャベツが邪魔をします。

「ママごめんなさい」

カット　長井多美栄



「いいよ、いいよ。キャベツも使おうね」

そのままの子どもと一つになっていこうとする親の存在意義に、ふと阿弥陀さまを味わわせていただいた情景でした。

◇

二十代前半の頃、夢や目標もあやふやなままアルバイト生活をしていたとき、「はじめてのおつかい」に登場する同じような母と子の情景を見た私は、いたたまれない思いになり、映し出されるすべての情景に「甘えんな」と罵倒し、それ以来見ることを避けていたのでした。

阿弥陀さまは、おまえを救わずにはおれないと、摂め取って決して見捨てはしない南無阿弥陀仏のお念仏となって、今まさに名告り続けてくださいます。この私のために。

自分中心であったことすら知らない私に、何の条件もつけずに「われにまかせよ」と名を告げてくださる阿弥陀さま。「大丈夫、まだ頑張れる」と、もう自分をごまかす必要はありません。同時に、ごまかすことのできない自己の姿を知らされると、誰にも依存しない、迷惑をかけないと、かたくなに思っていた私中心の生き方が、自分も他者も傷つける、狭く苦しい世界でしかなかったと気づかされ、恥ずかしさと痛みが生まれます。

阿弥陀さまにすっぽり抱かれたお慈悲にあたためられつつ、つねに照らされる厳しさにも尊いお育てをいただくことでした。